

P-54

続命湯の糖尿病病態への影響

東京大学 医学部 生体防御機能学

○富井明望, 丁 宗鐵

【目的】：続命湯は金匱要略に収載されている方剤の一つで、通常中風など脳血管障害に使用されているが、我々は外来通院中の糖尿病患者へ続命湯を投与し、糖尿病への影響について検討した。

【対象と方法】：本人の同意を得た上、非インスリン依存性糖尿病患者 8 人に続命湯を経口投与した。患者の内訳は男性 4 名、女性 4 名、平均年齢 63 歳、インスリン投与者 6 名、他 2 名に経口降血糖薬を投与されている。続命湯平均投与期間：29 日；糖尿病平均罹患期間：7.15 年である。続命湯の投与方法は生薬で朝 1 回煎じ、1 日 2 回或いは 3 回経口投与した。全例投与期間中毎日朝食前空腹時その血糖を自己測定させた。測定にはノボ・ノルディスク社製ノボアシストを使用した。また、投与開始日及び投与後終了日にそれぞれ HbA1c を測定した。

【結果】：朝空腹時平均血糖は著明な変化が見られなかったが、HbA1c は有意な低下を認めた。その他糖尿病の関連検査は有意な変化が見られなかった。また、長期間投与による影響を検討するため、3 例を継続投与している。

【考察】：続命湯はまた古今録驗続命湯といい、その使用は元来中風による四肢麻痺、運動及び意識障害、頭痛、喘鳴、身体の疼痛、口渴などの症状が随伴している場合に使用されたが、一時ほとんど使用されていなかった。大塚敬節、藤平健両氏の研究報告で新しい分野の使用が一般的になった。

我々はすでに自己免疫糖尿病モデルマウスに人参湯、臍島障害モデルマウスに麻黄湯を投与して、血糖の有意な低下及び組織所見の改善を認めた。続命湯の構成生薬は、麻黄、桂枝、当帰、人参、石膏、乾姜、甘草、杏仁、川芎など 9 味であり、麻黄湯及び人参湯と基本的にほぼ同等である。今回日常生活活動に影響されやすい空腹時平均血糖には明らかな影響を与えなかったが、1～3 ヶ月の平均血糖を反映するグリコヘモグロビン (HbA1c) の有意な低下を認めた。続命湯及び関連方剤に糖尿病モデルマウスと同様な機序で高血糖状態の改善に有効であると考えられる。

1) 丁宗鐵他；糖尿病に対する続命湯の使用経験, 日本東洋医学会学術総会 50 (1999.5)